

普門寺からのお便り

ヨーロッパ国際布教師

大悲山普門寺アイゼンブッフ禅センター

中川 正壽

過日は育英会募集要項を確かに拝受いたしました。
した。

さて二〇一六年はドイツ普門寺創立より満
二十周年となります。横浜善光寺様より多大の
ご支援を賜ってまいりました。心より感謝申し
上げます。

普門寺山内はコースの定着とともにサンガゲ
ループが成長して、普門寺の活動になくてはな
らない存在となっています。

さて、近年はドイツの十を超える主な都市で
在独日本人の方々が、老後を考え老後に備え学
び合う会が設立されています。この運動はドイ
ツ政府も大いにバックアップし、日本政府も対
応するようになっていきます。法律、医療、介護
のサポートなどのほかに、生きる死ぬというこ
とをスピリチュアルな面から取り組むというこ
とで、会のメンバーでありつつ講師の一人とし
て呼ばれ、講演と質疑応答を務めます。本年夏
はベルリン日本大使館が会場のひとつでした。
これもまた普門寺活動の一端と理解していま
す。私の講演のあと、あるグループは早速に二
泊三日でここ普門寺に参禅研修にやって来まし
た。外国にあつて老い死んでゆくということは、
全く文化の違う日本に生まれ育った在独在欧の
私たちには様々な面での学習と相互扶助が必要
です。普門寺はこうした面でもお役に立ちたい
と思っています。

最後に貴育英会並びに貴山の一層のご発展を
心より祈念申し上げます。

■二〇一五年一月

成寿山善光寺尊董

謹啓 過日は『成寿』冬季号をご恵送頂き
り難うございました。

ご住職のご活躍に感服いたしております。
また先号には拙寺アイゼンブツ禅センター
からの報告を全文ご掲載いただきまして大変恐
縮致しました。あれからさらに一年以上が経ち、
サンガメンバーが積極的な活動を進め、また村
の女性陣チームも人も増えしっかりとした土台
が出来ております。

私は山内の活動のほかに出張があります。ド
イツ国内には日本人による老後に備え老後を考
える「友の会」が各地に出来ておりますが、そ

の本部より招聘があり「生きるということ」と
いうテーマで話ばかりではなく簡単な椅子坐禅
の瞑想の手ほどきもします。本年はベルリン日
本大使館の会場ですることになっていきます。時
代と国と文化の違いを越えて生老病死は人間に
とって最大のテーマです。

丁度私どもは冬安居中ですが、とりわけこの
五日間正味四日間と短いものですが、眼蔵会と
して道元禅師の『正法眼蔵山水経』の冒頭を参
究しました。丁度昨日より雪が降り積もり禅師
の漢詩が思い出され講義中に引き合いに出して
紹介したことでした。

「雪」

生涯事事是非乱る

物に対して真を失す虚実の間

多歳徒らに看る山に雪ありと

今冬忽ち覚ゆ雪の山となることを

まことに私たちは日常「雪」の真に出会うことなく、「雪」を解釈してなんの出会いもなく感動もなく素通りしているようです。『山水経』には芙蓉道楷禅師の強烈な申し分「青山常運歩、石女夜生児」が取り上げられています。山が歩き、石造りの女が子を産むというわけです。ちようど私たちが雪を見て雪に出会わないのをガツンと警告されているようです。

ドイツ普門寺は来年九月三日創立二十周年を祝います。(東京にあるドイツ普門寺国際友の会が再び動き出すようですが、詳細はまだこれからです)

紆余曲折ようやく形を成してきたかと振り返りますとはや二十年！さらにこれから二十年欲しいところですよ。

総監部への年度の報告とプログラムを同封いたしました。

「横浜善光寺留学僧育英会」のさらなるご発

展を祈念いたしました、このたびの報告がてらの御礼の結びとさせていただきます。

では今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。
合掌

■平成二十六(二〇一四)年度報告

第一 普門寺における活動は同封のプログラムの通り

第二 ミュンヘン参禅会「正法会」を指導

第三 DeJ&友の会主催による講演会

テーマ…生きるということ

五月三十一日 デュッセルドルフ

六月一日 ラインネッカー友の会

第四 スイス ラサールハウスにおける会議

「西洋における禅」に講師の一人として参加

第五 袈裟把針の会「福田会」の定着

第六 臘八摂心への参加者の増加

昨年十六名、本年十八名

(一日十四回 一回四十五分の坐禅。最

終日は十二月七日夜より十二月八日早

暁五時まで徹夜坐禅)

長年心に掛けてきた在欧日本人の方々に日本僧侶として何かお手伝いできることはないかと心がけてきたが、本年ようやくそれが実現した。来年はベルリンにおける日本大使館とDeutsche Friends of the Churchによる講演会を担当する。

昨年のドイツ最大キリスト教メデイテーションセンター・ベネディクトゥスホーフの大会に招聘されたのに引き続き、本年はスイス最大のキリスト教メデイテーションセンターの大会議「西洋における禅」に招聘される。ともに好評を得る。

普門寺サンガは順調に定着発展している。

袈裟把針「福田会」はサンガメンバーにとって大きな意味を獲得した。また選抜したサンガメンバーに入門講話などを担当させている。これもまたサンガメンバーすべてによい刺激となっている。

■二〇一五年三月

拝啓 ご無沙汰しております。昨年はお世話になりました。はや四月がやって来ようとしていますがご健勝にお過ごしのことと存じます。

日ごろのご無沙汰をお詫びがてら、この度の冬安居を振り返り報告させていただきます。

その前にさて今の日本はどうなっているのでしょうか。YouTubeで見る日経と朝日の記事ではよく分かりませんが、新チューリッヒ新聞国際版に時々出る日本の記事を読むとこちらのほうが本質をついているように思えます

が……。

いま普門寺の冬安居の修行期間が終わり、その後が続いた二つの撰心を終えて、ここ二週間山内は静かです。

この安居では十年前に取り組んだものの最後までは出来なかった『山水経』に再び取り組み、今度は巻末まで終えるべく続けています。「山」の分が終わりました。原文がドイツ語になるわけはありませんが、原文の内容を伝えるべく努力しています。今度は手ごたえがあり読み込むことの楽しさも少し感じています。また尺八も四ヶ月ぶりに手にしています。坐禅三昧、眼蔵三昧、そしてこれからはセミナーが続きますが、作務に庭仕事、ジャガイモ畑のある野菜畑と手入れに忙しくなります。電話来ず、メールもほとんどない。思えば曹洞宗という組織のなかでの公務がないだけにこういう日暮らしが出来て有り難く思っています。

前にもお知らせした在独日本人が作っている各地の「友の会」という老後扶助の会にてお話しすることが今年もいくつかあって、とくにベルリンの日本大使館と私も会員である「DoJ友の会」との共催で私の講演会が予定されています。

当地では日本人のかかわる公の場、とくに官庁では仏教僧侶である私を講演に呼ぶことは一切ありませんので、これは「友の会」のお陰です。「友の会」でお話が出来て在独日本人の方との新しいコンタクトが生まれ、大変うれしく思っています。

全ヨーロッパもドイツも中間層が貧困層に落ちていって大きな社会問題になっていますが、今のままの資本主義ではさらに貧富の差が大きくなっていくようです。とくにドイツの中でも貧困の拡がっている地域があり、また老人や母子家庭が生活難に喘いでいます。田〇の中で一

番豊かなドイツですら一般国民の生活は楽ではなくなってきました。年金はどんどん削られてきました。

人類全体で終末に突進しているような昨今ですが、その中で元気があつて生きることには積極的な若者たちに触れ合えることは楽しい限りです。この週末にそれぞれ独立している二人の若い左官職人がこの禅コースにやつて来ます。

その友達と都合三人で禅堂の天井と壁を塗つてくれています。いままで長年私の元にやつて来る人たちをまとめてサンガづくりに精を出してきましたが、これがようやく軌道に乗っていますので、今度はさらにどんどん参加の増えている二十代、三十代の人たちをどうまとめてゆくにあります。禅入門のコースのあと、若者に声をかけて自主的に若い普門寺経験者のインターネット・コンタクトを立ち上げてもらおうべく、すでに二十代半ばの女性がこの役を引き受

けてくれています。

こういうことを動かす発想と機動力はいつもルートから出てきますが、それを実行してゆくスザンネも着々と成長しています。あとは私が健康で長生きしてしっかりした後継者を育ててゆくことが課題です。長年の脚の痛み、背中の差し込む痛みもなく、この三ヶ月再び十分に坐禅が出来るようになって、喜ぶとともに責任を感じています。これもまたひとえにルートの健康にかかわる長年の知識と経験のお陰です。

朝夕零下前後に冷え込みますが日中は暖かく、猫も嬉々として庭を徘徊しています。

二月末に観音院さんと電話でゆつくりとお話しすることが出来ました。私も懸念していたとおり同じ点を指摘されました。普門寺友の会をご支援いただいたきた奈良先生、小坂老師はご高齢その上ご多忙であること、またドイツ普門寺はこれまでにすでに十分にご支援いただいて

きたこと、観音院様、永見寺様またお越しいただいた御寺院方も昨今は立场上さらにお忙しい日々を送っておられること、などから来年の二十周年は普門寺サンガでお祝いするのがよいであろう、もし日本から来られる御寺院があるのならば個人として来られればよいであろう、ということでした。私も同感であります。私たちももうヒヨコではなく若鶏として成長してゆきたいものです。

長年お世話になりご支援をいただきましてまことに有り難うございました。

では今一度心よりご健勝をお祈りして次回お目にかかれる日を楽しみにしております。

合掌

二〇一五年三月一五日

中川正壽九拝

追伸 このところ YouTube で昭和の終わり頃一九七〇年代頃の美空ひばり、島倉千代子の歌

唱、「忠臣蔵」最後の部分の三船敏郎、仲代達也、また横山やすし・西川きよしの漫才を楽しんでいます。当時私は何の関心もなくまた機会もありませんでしたが、ここドイツの片田舎で深夜にこれらと接するタイムトンネルに入ったように当時の日本が現出します。当時世間はこういうふうだったのだと初めて発見して、自分の中になかったものが満たされる思いです。

もう一つ、高い値段でしたが禅文化研究所出版の『景德伝灯録五』を机上において手当たり次第好きなどころを開いて一、二ページ読みますが、曹洞系の祖師たちが扱われており、また注釈も行き届いて、これもまたコーヒーブレイクのように楽しみです。

このような日暮らしです……

どうぞご自愛下さり、善光寺様のご発展を祈念致します。



育英生からのお便り

李 子捷

(第二十七回育英生)

横浜善光寺留学僧育英会の皆様、ご無沙汰しておりますが、最近はいかがお過ごしでしょうか。先日『成寿』第四十四巻を受け取りました。今年度の育英生として採用されることができまして、心から感謝の意を表したいと思えます。

二〇一四年四月に駒澤大学大学院仏教学専攻の博士課程に入学することができました。石井公成教授、松本史朗教授、池田練太郎教授、奥野光賢教授、吉村誠教授等の諸先生に師事して、東アジア諸国の唯識仏教思想史を幅広い視点から研究するよう努めています。この一年間、漢字文献については、コンピュータを活用して語

法と用例に注意しつつ正確に読む恩師である石井教授の方法を身につけて、著者不明の文献の年代や成立地を推測できるよう努めるとともに、松本教授等の授業に参加して、梵語とチベットの語の読解力を向上させて、原文と漢訳の細かな思想的差違を把握できるようにしています。また、駒大には中国の様々な学派の研究者が多いため、諸先生の授業に参加して知識と視点の拡充に努めています。

今年度、日本で発表した論文を報告させていただきます。『杏雨書屋所蔵敦煌写本『入楞伽経疏』(羽726R)について』というテーマで、日本奈良東大寺編集の『南都佛教』(第98号)に掲載されました。東アジア仏教研究会で発表して、学会誌に掲載する予定です。テーマは『大乘起信論』の如来藏思想の再検討——真如との関係を中心として——です。日本印度学仏教学会で『大乘起信論』の如来藏思想の再検討

——『勝鬘經』・『楞伽經』・『宝性論』との対比を中心として——』というテーマで発表して、『印度学仏教学研究』第六十三巻に掲載されました。駒澤大学の定例研究発表会で、『究竟一乘宝性論』の「gotra（種姓）」について——なぜ那耆摩提は漢訳本でこの語を翻訳しなかったか——』というテーマで発表して、『駒澤大学大学院仏教学研究会年報』第四十八号に掲載される予定です。

今年の秋、幸いなことに、文部科学省直属の日本学術振興会より、平成二十七年～二十八年年度の日本学術振興会特別研究院DCとして採用されました。二〇一五年四月から二〇一七年三月まで、日本学術振興会特別研究員DCとして自分の研究を続けていくことができるようになりました。これは駒澤大学大学院仏教学専攻の最初例ではないかと諸先生に言われました。この三年間の受賞者を見ますと、毎年、「中国

哲学・インド哲学・仏教学」という分野においては、日本全国のすべての博士課程の在学者から二人しか採用しなかった、という厳しい実状を了解しました。

これからも引き続き努力していきます。改めて皆様に感謝いたします。

